

# ヴァイキング期スウェーデンの交易拠点——ビルカ(Birka)の盛衰について——

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-04-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 原, 征明 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24525">https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24525</a>

# ヴァイキング期スウェーデンの 交易拠点

——ビルカ (Birka) の盛衰について——

原 征 明

## 目 次

1. はしがき
2. ビルカの遺跡——その位置と概要——
3. 出土品・交易品および東方ルート
4. ビルカの衰退とその諸原因  
——結びにかえて——

## 1. はしがき

私は先の別稿で、いわゆるヴァイキング (Vikings) の活動について少しく考察をし、凶暴・残虐きわまりなき海賊的略奪者に他ならなかったとするその伝統的なイメージに若干の修正を加え、且つまた西欧の初期中世社会経済史に関わりがあると思われるいくつかの事例についても指摘を試みておいた<sup>(1)</sup>。

ところで、8世紀後半ないし9世紀初頭を画期とし、およそ三世紀間に及ぶヴァイキングの爆発的活動の中には、その略奪的性格と併せて新天地を求めた冒険的航海と植民、それに征服や建国など多様な側面を見出すことができようが、これらと共に関心をひくのは、なかでもこの時代における北欧商業の広範な展開である。もとより、その劣悪で制約された生活条件にあるスカンジナビア人たちは、土地からの貧弱な収穫に依拠する農耕

(1) 拙稿「ヴァイキング (Vikings) 史研究序説」(『東北学院大学論集』経済学、第81号所収)、17—40頁参照。伝統的なヴァイキング像の修正についていえば、要するに彼らの故土である北欧・スカンジナビア諸地域の当時の極めて制約された自然地理的定住環境をふまえ、且つまたそこでの発展史的な視点からみたヴァイキング期の社会的特質との関連で、彼らの活動の意味が解釈されるべきではないか、ということである。

### ヴァイキング期スウェーデンの交易拠点

者にとどまらず、すでにヴァイキング時代以前からこの地方の特産物、例えば良質の毛皮や皮革それにセイウチの牙 (walrus tusks)、あるいは琥珀 (amber) などを交易品として外部へ輸出していた。従ってまた、その逆に西欧からは北欧の乏しい自給的生活の補充やその他の目的に有用な見返り品が流入したことも知られるところなのである<sup>(2)</sup>。実際、暗黒時代 (Dark Ages) におけるスカンジナビアならびにバルト海東岸諸地域が、西欧の各地で高い評価をうけた、いくつかの原材料供給地をなしていたことは間違いない。即ちそれは、今ここに掲げたものについていえば、毛皮のうちその最良の品はそもそも寒冷地において産出されたからであり、あるいはまたセイウチの牙についても、当時稀少であった象牙の代替品として装飾品などの素材に用いられ、グリーンランド発見以前におけるその唯一の産地は、ノルウェーに他ならなかったからである<sup>(3)</sup>。さらにまた、化石状樹脂の埋蔵物である高価な琥珀にしても、西欧にも一部産出したとはいえ、その最も豊富な供給地はバルト海周辺、とりわけサムランド (Samland) ならびにユトランド (Jutland) 地方であったためである<sup>(4)</sup>。他方、ストックホルム近傍のヘルゲ (Helgö) 地域からは、既に5世紀以来の西欧からの輸入品が多数出土したことも知られるところなのである<sup>(5)</sup>。

こうした意味で、前ヴァイキング時代の交易についても、その存在に疑いの余地はないのだが、北欧商業はヴァイキング時代の到来を契機に、なお一層の繁栄を示してくるようと思われる。因みに、別稿でも指摘した通

(2) 例えば、А. Я. Гуревич. ПОХОДЫ ВИКИНГОВ (Москва, 1966) グレーヴィチ, 中山一郎訳『バイキング遠征誌』(大陸書房, 昭和46年), 31頁等を参照。

(3) Cf. P. H. Sawyer, 'Wics, Kings and Vikings', *The Vikings—Proceedings of the Symposium of the Faculty of Art of Uppsala University—* (Uppsala, 1978), p. 23.

(4) Cf. C. W. Beck, 'Amber in Archaeology', *Archaeology*, 23 (1970), pp. 7—11.

(5) Frédéric Durand, *Les Vikings* (Collection QUE SAIS-JE ? N°1188, Presses Universitaires de France, 1965), 久野・日置共訳『ヴァイキング』(白水社, 昭和50年), 20頁参照。Gwyn Jones, *A History of the Vikings* (Oxford, 1969), p. 78.

## ヴァイキング期スウェーデンの交易拠点

りこの時期の北欧商業の拠点としては、当面の考察対象であるスウェーデン・メーラル湖 (Mälär) 上のビルカ (Birka) をはじめとし、シグトゥナ (Sigtuna)、対西欧商業の拠点でもあったといえるデンマークのヘデビュー (Hedeby, *Haitabu*) とシュレスヴィヒ (Schleswig)、それにノルウェーのスキリングサル (Skiringssal, *Sciringescheal*) 即ち今日のカウパング (Kaupang) に加え、バルト海沿岸のトゥルソ (Truso)、ユムネ (Jumne) つまりヴォーリン (Wollin) などが顕在化した。そして、これらは共に当時の北欧経済にある種の豊かさをもたらすところの対外的な商業の仲介者として、その役割を演じていたと思われる。

なかでも、スウェーデンのビルカは、デンマークのヘデビューと並ぶ北欧商業の一大拠点として、東方イスラム世界につながる遠隔地商業の起点をなしていたといえるだろう。そこで、以下本稿ではヴァイキング期商業拠点としてのビルカの盛衰をめぐる少しく考察をしようと意図するわけである。

## 2. ビルカの遺跡——その位置と概要——

スウェーデンの中部は、スヴェア族 (Svea, Swedes) の住んでいた土地つまりスヴェアランド (Svealand) と呼ばれ、古ウプサラ (Gamla Uppsala) の北方 5 km の周辺ならびにビルカ遺跡があるメーラル湖 (Mälär) のほとりに、ほぼ 7—8 世紀以降スヴェア族が抬頭してきたところである。そしてこの中部地帯はメーラル湖をはじめ、この国最大のベーネル湖 (Vänér) ならびにベッテル湖 (Vätter) などを擁し、しかもスウェーデンにあっては比較的肥沃な平地にめぐまれている<sup>(6)</sup>ところでもあった。

ところでヴァイキング時代のビルカはストックホルムの西方約 30 km、メーラル湖上のビョルコ島 (Björkö) に位置しているが、隣島ヘルゲ (Helgö)

(6) この中部スウェーデン地帯の景観や気候上の特色については、たとえば Andrew. C. O'dell, *The Scandinavian World* (Longmans, 1963), p. 110 ff., esp. pp. 115—117. および『世界地理風俗体系』・19・北ヨーロッパ (誠文堂新光社, 昭和41年), 11—12頁等を参照。

ヴァイキング期スウェーデンの交易拠点

には既に7-8世紀ころよりリルロン (Lillön) なる商業上の拠点<sup>(7)</sup>が存在し、ヴァイキング時代に入ってビルカにその中心地としての役割が移動したものとみられる。因みに、ビョルコ島とは「白樺の島」という意味であるが、Fig. 1. にみるごとくこの島はバルト海に面して開けた海岸地帯

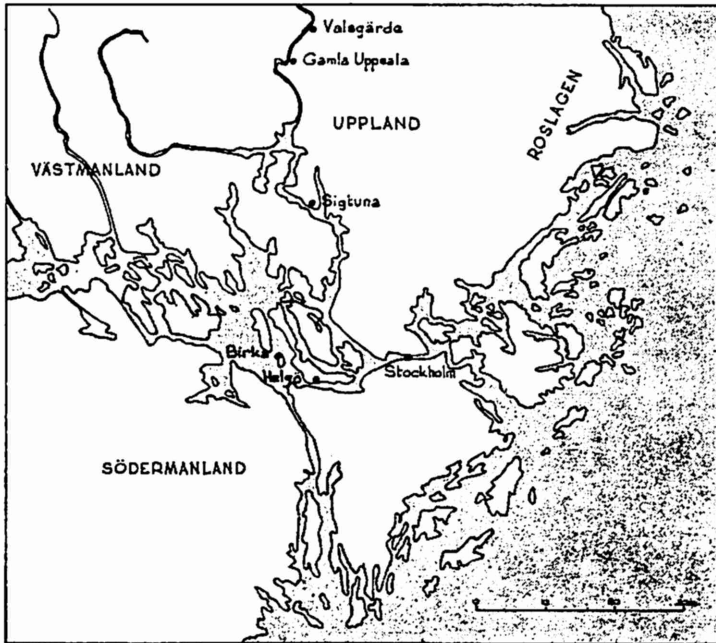


Fig. 1. Sweden : The East Central Provinces, Cit., G. Jones, *A History of the Vikings* (Oxford, 1969), p. 172.

(7) リルロン (Lillön) は、今世紀1954年以降の発掘でその詳細が明らかにされてきているが、この遺跡からはアラビア貨幣と共にフランク産ガラス製品の破片、アイルランド製司教しゃく杖、スカンジナビア産の金の鑑札そしておそらくアラビア圏経由でインドから到来したと考えられる珍品、青銅製の小さな仏像などが出土している。因みに、ビルカに先行して7・8世紀における北欧毛皮ルートを独占していたのもこの場所であるが、しかし鉄溶解の形跡、金属加工用道具も発見されたことから、ここは単なる商業拠点にとどまらず、対フィンランドおよびおそらくバルト海地域むけスウェーデン商業の輸出品を生産していた手工業拠点でもあった、とみなされている。

### ヴァイキング期スウェーデンの交易拠点

から複雑な地形によって遮蔽された場所にあるため、海上からそこに到達するのに先ずスウェーデン群島 (Sweden archipelago) から入って狭い海峡を航行し、メーラル湖の東側に出なければならなかった。南北および東西に走る航行ルートが交叉する水路の中心部にこの島が位置し、ビルカの遺跡は、その北の岬に発見された<sup>(8)</sup>のである。かくしてビルカは、ヴァイキング時代におけるいま一つの主要交易拠点デンマークのヘデビュー (Hedeby) が、当時のヴァイキング船によって航行可能であったとはいえ狭小なるスリー・フィヨルド (Slie Fjord) の奥まった場所に位置していたことと、ある種の類似性を有している。この特色は、両者ともヴァイキング時代の終焉と共に急速に衰退し、従ってまた、いわゆる「商業の復活」期における北欧商業——それは、かさばる商品を主要取引物とする——へとつながる生命を持続しえなかった諸事情と、何らかの関連がありはしないだろうか。

さて、ビルカ (Birka) と呼ばれるところにスヴェア族ないしスウェード族が大規模な交易拠点を有していたことを後世に伝えてきた歴史上の文献は、そもそも布教者聖アンスガル<sup>(9)</sup> (Ansgar, Anskar) の後継者リムバート (Rimbert) によって西暦 870 年代に執筆された『アンスガル伝』

---

(前ページ注(7)より続く) A. Я. Гуревич, ПОХОДЫ ВИКИНГОВ (Москва, 1966), 前掲邦訳, 88頁。なお, 1961年には Helgö 遺跡発掘の最初の三年間の研究報告が刊行されている。Wilhelm Holmqvist ed., B. Arrhenius, P. Lundström collaboration, *Excavation at Helgö I, Report for 1954—1956* (Stockholm, 1961). この報告の詳細については, 熊野聰「プレ・ヴァイキング時代のスウェーデン商業」(『彦根論叢』第129・130号, 昭和43年)を参照。

(8) Johannes Brøndsted, *The Vikings* (Penguin Books, 1978), p. 160.

(9) 周知の通り, アンスガル (Ansgar) は後にハンブルグにおける最初の司教 (archbishop) となったベネディクト派の人物である。ルイ敬虔王 (Louis the Pious) による北歐への布教の命をうけ, ヴァイキングによる攻撃の危険を経験しながらヘデビューからビルカに向けて航海した。『アンスガル伝』 (*Vita Ansgarii*) の要旨や, 生涯における布教活動については, 例えば Cf. Rudolf Poertner, *The Vikings—Rise and Fall of the North Sea Kings—*, trans. & adopted by Sophie Wilkins (St. James Press, 1975), pp. 280—281.

(*Vita Ansgarii*) なのであった。もとより、それは北欧スカンジナビア地域に派遣された伝導者の布教努力を記録したものであったが、この中でリンバートは当時のバルト海諸地域と西欧との交易関係についても述べていたという点で、価値ある史料の一つとされている。今日のデンマークとスウェーデンの布教を担ったアンスガルは、ヘデビューを拠点にして約20年の間隔をおき、830年頃と850年頃の二度にわたってビルカを訪れたのであるが、その最初は温和なビョルン王 (Björn) の治世のときであり、後には勇猛なるオラーフ王 (Olaf) の治世のときであった<sup>(10)</sup>。

この他、文献上では11世紀後半から始まるブレーメンのアダム (Adam of Bremen, 1075年?没) の手による『ハンブルグ教会大司教伝』(*Gesta Hammaburgensis Ecclesiae Pontificum*) の中でもビルカのことを数度言及されているといわれるが、因みにその頃にはビルカが既に衰退しているものと考えられるのである。

ところで、このビルカの正確な場所やその都市集落が解明されるようになったのは17世紀以降のことである。先ず、ヨハネス・ハドルフ (Johannes Hadorph, 1630—93年) なる王室古器物管理者の手によってビョルコ島の調査が実施されたのを契機に、1826年にはアレクサンダー・セトン (Alexander Seton) がビルカ埋葬墓の発掘を手がけ、1870年代に入ってヤルマル・ストルプ (Hjalmar Stolpe) により、ようやく遺跡の全貌が明確化された。政府の資金援助を得て1872年以来23年間に及ぶ三度の発掘を行った彼 (=Stolpe) が、ビルカ遺跡の「黒土層」(Black Earth) ——人間の居住地であったことを示す地層——と1100基の埋葬墓などの調査結果を、その詳細に測定した位置関係と共に製図化したことによる<sup>(11)</sup>。

(10) Cf. J. Brøndsted, *op.cit.*, p.161 foot notes., Gwyn Jones, *A History of the Vikings* (Oxford, 1969), p. 78, pp. 106—107., P. H. Sawyer, *The Age of the Vikings* (Arnold, 1975), p.33.

(11) Holger Arbman, *The Vikings* (Thames & Hudson, 1970), pp. 37—38., Maj Odelberg, *BIRKA* (Statens Historiska museum, Stockholm, 1974), p. 31.

ヴァイキング期スウェーデンの交易拠点

Fig. 2. はビルカ遺跡の概略を示すが、みられる通りここには先ず南北へとほぼ直線的に走る塁壁 (rampart) がある。この塁壁は高さ約6フィート、幅20—40フィートのものであり、南端の部分は Fig. 2. の破線で示されるごとく、いま一つの楕円状塁壁へとつながる全長550ヤードのものであった。因みに、これを境界とする西側の部分がいわゆる「黒土層」区域であり、当時700—1000人と推定される人口を擁した<sup>(12)</sup>とみられる都市集落に相当する部分なのである。楕円状塁壁は、この黒土層の南西に位置し、その規模は約25×50フィートのもので高台に設けられた丘砦 (hill-fort) ないし要塞を意味し、図にみられる南・北・東の三面にある間隙部分に、当時木造の見張所 (tower) があったと考えられている。そこから

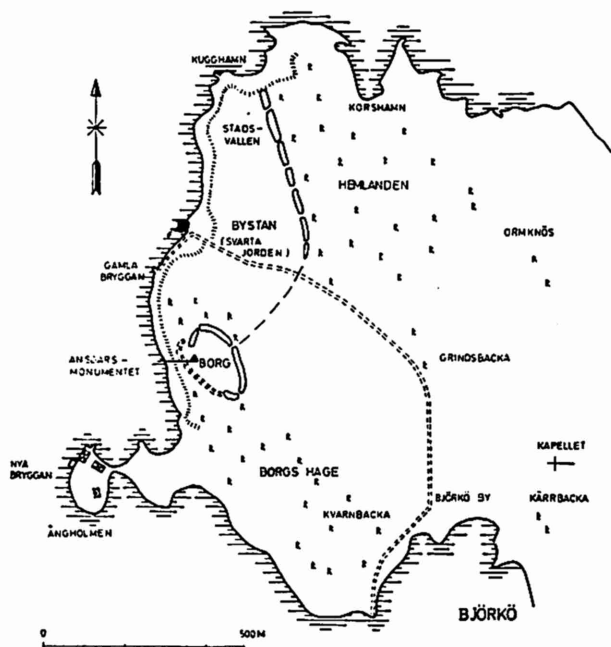


Fig. 2. Birka in Lake Mälaren, Cit., Maj Odelberg, *BIRKA*, rear cover.

(12) *Ibid.*, p. 32.



は都市集落ビルカの全体と湖の遠方を眺望でき、時にはまた、いわば避難所としての役割が与えられていたのかも知れない。

なお、都市集落を囲み南北に走る塁壁にみられる間隙にも、同様にして木造りのタワーが設けられていたといえようが、楕円状丘砦は別として、そうした塁壁は必ずしもビルカ創設 (=800年頃) の最初から存在したものでなく、むしろこの場所がヴァイキング時代における商業拠点として重要性をおびるにしたがって構築されていった形跡が濃厚<sup>14)</sup>である。

さて、約30エーカーの黒土層をなす都市集落については、ヤルマー・ストルプの発掘調査以来、その出土品からみて明らかにこの地で手工業的生産も営まれていた<sup>15)</sup>ことが判明している点で関心を呼ぶが、しかし当面の商業史的視点からみてさらに重要と思われるのは、このビョルコ島に残された埋葬墓なのである。そうした埋葬墓の多くは、黒土層の背後で南北に走る塁壁の東側、即ち松や白樺の樹木がおい繁げる地域に集中するが、一部の土葬墓——注(13)参照——や富裕な消費層＝政治的支配層のものと考えられる室墓地<sup>16)</sup>を除き、その大半がこの時代に一般的な火葬 (cremation) に付された塚 (barrow, Hügelgräber) ないし土饅頭の形態で存在していたのである。

13) G. Jones, *op. cit.*, pp. 168—169., H. Arbman, *op. cit.*, pp. 40—41., J. Brøndsted, *op. cit.*, p. 161. 防御壁の構築年代は10世紀頃と推定されるのであるが、このことは塁壁がその上に設けられていったところが旧来の埋葬地をなして、そこから925年に帰属する鎗貨が出土したことによる。また、塁壁の要衝は職業戦士たちによって固められていたようである。即ち、いくつかある土葬 (inhumation) 墓から、剣・斧・矢じり等の武器や鎧などを副葬品とした人骨 それに戦士が乗った馬の骨などが証拠として発見されている。Cf. G. Jones, *op. cit.*, p. 170. Fig. 20., M. Odelberg, *op. cit.*, p. 2. Figure & p. 32., P. H. Sawyer. *op. cit.*, pp. 178—179.

14) 青銅の装飾品製作に用いられた鋳型の断片や半製品、ピンと櫛、それに最近行われた調査 (1970—71) では皮製の靴の切れはしなども出土している。さらに、ナイフなどの製作に必要であった鉄の溶解、鍛冶工の存在もうかがわれる。Cf. G. Jones, *op. cit.*, p. 171., M. Odelberg, *op. cit.*, p. 33.

15) ビルカでは、そうした室墓地が塁壁の内側で三基、またこの島の船つき場を意味した *Kugghamn* —— Fig. 2. 参照 —— の南側で発見されている。J. Brøndsted, *op. cit.*, p. 162.

### ヴァイキング期スウェーデンの交易拠点

既述のように、19世紀のストルプ (H. Stolp) によっては1100基が調べられたが、実際にはこのビルカ遺跡における9ヘクタールの規模の埋葬地全体で2000基以上もの塚の存在が確認されており、そこからの豊富な出土品はビルカをしてヴァイキング期スカンジナビア地方における最大級の遺跡ならしめている。なかでも重要なのは、そうした埋葬墓のうち副葬品の一部として、貴金属の重量測定に使用された小天秤 (small balance) を内包するもの三基、あるいはまた、そうした天秤と共に用いられた数個の錘=分銅が出土したものが130基あるなど、明らかに商人たちの塚であ



Fig. 3. The barrow in Hemlanden, Cit., M. Odelberg, *op. cit.*, p. 12.

(16) Frédéric Durand, *Les Vikings* (Collection QUE SAIS-JE ? N°1188, 1965), Presses Universitaires de France, 前掲邦訳, 97—98頁, David M. Wilson, *The Vikings and their Origins* (Thames & Hudson, 1976), p. 95, P. H. Sawyer, *op. cit.*, p. 178.

ることを示唆するものが少なくないことである。加えていえば、そこに埋葬された商人たちないし一大交易拠点たるビルカの利害そのものが、スカンジナビア地方や西欧との関係において存在したことはもとより、さらにとりわけ東方イスラム世界へと指向し、そうした遠方の地域との強力な接触の中にあつたものと確証されうる出土品が埋葬墓から発見された<sup>(7)</sup>という点で、注目に値するのである。

換言すれば、ヴァイキング時代のビルカは、その当時銀を最も豊富に産出したとみられる東方諸地域と関わり、そうした交易ルートのいわば起点としての役割を有していたといえることなのである。以下、それらのことについて考察してみよう。

### 3. 出土品・交易品および東方ルート

ビルカで発見された大量のアラビア産銀貨、それに刻み銀 (hacksilver) などの意味は後に考察するとして、この場所がヴァイキング時代における交易拠点であることを示唆するものとして先ずあげられるべき出土品は、既述のごとき取引用の小天秤と分銅だろう。

またこのほかビルカでは、装飾用に加工せられた西欧のコインをはじめとし、多数のラインラント産ガラス製品——円錐形ワイン・カップ、ゲー

(7) 例えば、このビルカにおける若干の埋葬墓からは壺やガラス容器など、その出所がラインラント (Rhineland) 産であることが明らかな出土品、さらには10世紀初頭ヨーク (York) の貨幣やフランク製のものを模倣して作られた9世紀デンマークの貨幣も発見された。しかしそうした西欧からの貨幣は、すべて装飾品として役立つよう加工が施されているところから、これらは都市集落ビルカにあって僅かの役割を有しているにすぎない。Cf. H. Arbman, *Schweden und das karolingische Reich* (Stockholm, 1937), kap. iii. & iv., besonders. S. 240.

ところが、西欧から到来した貨幣を内包する埋葬墓が13基であるのに対し、東方イスラム圏からの貨幣とその断片を含むものが92基に達するし、さらに42基には絹布が存在していた形跡がある。P. H. Sawyer, *op. cit.*, p. 181., A. Я. Гуревич, *op. cit.*, 前掲邦訳87—88頁。Agnes Geijer, *Birka Undersuhungen und Studien* III, Die Textilfunde aus den Gräbern (Kungl. Vitterhets Historie och Antikvitets Akademien, 1938), SS. 58—67.

### ヴァイキング期スウェーデンの交易拠点

ム・ストーン (game stone) ——や黄金製装身具、それに産地不明ではあるが水晶製ネックレスなども出土した<sup>(18)</sup>。これらに対して、いわば布地など地中であって腐蝕しやすい物質が出土することは極めて稀なこととみななければならないが、幸運にもビルカでは粗雑な織り方のスカンジナビア産布地と共に、明らかにフリージア起源を有する見事なウーステッド (worsted) の断片が多く発見されている<sup>(19)</sup>。さらにまた、前節においてはこの遺跡に絹布が存在していた形跡のある——注(17)、参照——ことを指摘したのだが、その他ビザンチンやオリエント地方の金糸入り刺繍、組みひも、ビーズ等を織りこんだ縁飾りなども出土するのであって、これらのものはタタル人(韃靼人)が用いたカバン、アラブの馬具、ベルシャ産の青銅製水差し、シリア産の銀皿と共におそらくその大部分がボルガール (Bolgar) ならびにコンスタンチノーブル経由の東方ルートにのってこの地に運ばれてきたものとみなされる。そうした意味で東方諸地域と結びついた交易拠点としてのビルカの役割を浮きぼりにすることができるだろう。

もちろん、ビルカの交易拠点としての機能はそうした東方との関係にお

(18) Cf. Maj Odelberg, *BIRKA* (Statens Historiska museum, Stockholm, 1974), pp. 20—23., Gwyn Jones, *A History of the Vikings* (Oxford, 1969), plate. 16., Holger Arbman, *The Vikings* (Thames & Hudson, 1970), plates 16, 17 and the commentaries, p. 198., Rudolf Poertner, *The Vikings—Rise and Fall of the North Sea Kings*,—trans. & adopted by Sophie Wilkins (St. James Press, 1975), p. 197, 210.

因みに、最近公刊された以下の邦書には、これらビルカ出土品の一部が写真で掲載されている。N. H. K (未来への遺産) 取材記・Ⅲ『壮大な交流』(日本放送出版協会, 昭和50年), 275頁, 世界の博物館 14・『スウェーデン・デンマーク野外博物館』(講談社, 昭和53年), 124—129頁を参照。

(19) これらはまたビルカのみでなく、スキリングサル (Skiringssal), ゴトランド島東部 (East Gothland), ヘデビュー (Hedeby), オーゼベルイ (Oseberg) の墓地でも出土している。因みに、フリージア産布地に基礎をおく *Fries* なる貨幣——西欧では “woollen robe” ——が、スウェーデンでは12エルの *Fries* が1オーレ銀に、また92エルが1マルク銀に相当したという。R. Poertner, *op.cit.*, pp. 211—212.

(20) *Ibid.*, pp. 211—213.

いてのみ強調されるべきものでなく、ヴァイキング期スカンジナビア地方の既述のごとき主要特産物の集積地としても把握されねばならない。

因みに、考古学者たちによって北方の狩猟地とメーラル湖上のビルチ島 (Birch) の間の往来の多かったルート沿いに、矢じりやナイフなどの副葬品を有する明らかに狩猟者たちのものと考えられる墓が多数発見されているのもそのことの証拠であるし、他方ビルカ自体にあっても埋葬された者のうち、その両足にアイゼンを装着しているものが少なからず存在したこと、また周知の「黒土層」(Black Earth) では氷斧ならびに牛馬の骨で作られたスケートなど、冬期間に氷上を通過して最良の毛皮などをここに運ぶ際に使用されたとみられる装具が出土しているからなのである<sup>(2)</sup>。

以上、交易拠点ビルカからの出土品としては次にみる銀および銀貨を除きこれらのものをあげることができようが、当時この地にもたらされた西欧からの商品として、その他おそらくラインラント産の武器および貴重なるワインなどもあったと思われることをあわせて指摘しておく必要がある。即ちそれは、フランク産の刃物にスカンジナビア産の柄が付けられた剣が発見されるからであって、その大部分は攻撃的なヴァイキングにむけての、シャルルマーニュ帝による武器輸出禁止の後に、おそらく半製品の形で密輸されたものと解釈されうるし、後述の東方ルートにおいて活躍したルス (Rus) 商人たちがフランコニア製の広幅なる剣を身につけていたということ、われわれはアラブ人イヴン・ファドラン (Ibn Fadlan) の証言で知るからである。他方ワインの到来に関しては、一つにはビルカにおける既述の出土品、つまり円錐形ガラス・カップの存在からみて、それらがこの地で実際に使用されていた可能性があることに加え、『アンスガル伝』を記述した、かのリンバート (Rimbert) 司教による叙述の一部

(2) Cf. H. Arbman, *op. cit.*, p. 41., P. H. Sawyer, *The Age of the Vikings* (Arnold, 1975), p. 182., David M. Wilson, *The Vikings and their Origins* (Thames & Hudson, 1976), pp. 91—93. plates. 62, 63, 64 & illustrations, R. Poertner, *op. cit.*, p. 218ff., Johannes Brøndsted, *The Vikings* (Penguin Books, 1978), p. 162.

### ヴァイキング期スウェーデンの交易拠点

からも<sup>22)</sup>、そうした貴重な商品のビルカへの到来をみてほぼ誤りなきものと考えられるからである。

ところで、商業史的視点からみて最も注目される出土品は、ビルカ遺跡で発見された大量の銀および銀貨に他ならない。因みに、今日までの考古学的成果によれば、ビルカを含むスウェーデンだけでも200キログラム以上に達するヴァイキング時代の銀、即ち標準化された重量の銀塊や螺旋形腕輪、あるいは支払手段として小さく切断された「刻み銀」をはじめ、アラビアのディルヘム (*dirhem*)、イングランド貨幣、カロリング帝国ドレストッドで鑄造されたカロルス (*CAROLUS*) などの貨幣が発見された<sup>23)</sup>といわれるが、これらは少なからずスウェーデン系ヴァイキングと彼らの商業活動とのきわだった関係を示唆する有力な証拠の一つとみられるだけに、なおさら重要である。もとよりその場合、こうした貨幣ないし銀の出土品を考えると、そのすべてが現実の交易による直接の所産とは限らず、あるいは一部にいわば非商業的要因で運ばれたものも含まれていることがあるかも知れない<sup>24)</sup>点に、一般論としては留意せねばならないが、ビルカに関しては、これまでに示された諸事情や明らかに取引の必要上から

②② リンバート司教は、死期を悟った信仰の厚い Friedeburg なる一婦人に関わる800年頃のこととして、その婦人がキリストの聖体を懇願して特製の容器に入ったワインを買い、さらに娘に対しては自らの死後その財産のすべてを売却し、収益をドレストッド (Dorestad) の貪しい者達のために持参するよう指示した話を伝えているという。R. Poertner, *op. cit.*, p. 173.

②③ H. Arbman, *op. cit.*, plate 35, Viking coins., S. C. George, *The Vikings* (David & Charles, 1973), p. 19., D. M. Wilson, *op. cit.*, p. 46, plate 23.

②④ 考古学上の出土品が、ある場所から他の場所にむけての財貨の移動を証明するにせよ、それが直ちに交易ないし商業活動の結果であるとして短絡的に解釈されてはならないとしたグリアスン (Philip Grierson) の指摘は、この点で傾聴に値するだろう。

P. Grierson, 'Commerce in the Dark Ages', *Transaction of the Royal Historical Society*, 5th ser., ix (1959), pp. 123—140.

しかも、スカンジナビア地方全体についていえば、ヴァイキング時代に關わる貨幣出土品には略奪ないし戦闘をとまなう買納金——例えばディーン・ゲルト (Danegeld)——など、むしろ非商業的要因による移動の所産とみなされるものが、もちろん存在する。P. H. Sawyer, *op. cit.*, p. 192.

### ヴァイキング期スウェーデンの交易拠点

生じた刻み銀の存在、それにアラビア銀貨の大量出土から判断し、それが単純な略奪の結果以上のものであるとみなされる理由があるのである。しかしそれならば、ピルカにおいて象徴的に示されるこれら交易の所産たる銀は、そもそもいかなる商品の取引を通じて集積されたのであろうか。さらにまた、その支払手段として有効な銀はそれ自体、このヴァイキング時代の交易拠点からいかなる使用目的でどの方向に放出されたといえるのか。こうしたことが少しく解明される必要があるだろう。さしあたり後者の問題について若干の指摘をしておけば、それらの銀は既にみた西欧からの諸商品にむけて流通し、その購買力の一部をなしていたものとみて誤りなきものと思われる。このこととの関わりで、当時西欧世界ではローマ時代より存在していた従前の金貨流通が既に後退し、他方、シャルルマーニュ帝による780年の幣制改革——銀本位制採用——以来、銀が広く交換手段として機能していたことが想起されてよい。

さて、Fig. 4. はヴァイキングによる交易ルートを示すものであるが、ここからわれわれは、ピルカが東方諸地域へと指向するルートのいわば起点としての役割をはたしていたことを知る事ができよう。一般に、スウェーデン系ヴァイキングによる東方進出<sup>⑧</sup>の理由としては、今日のスウェーデン領土内の最南部、即ちスコーネ地方 (Skåne) が当時ディーン人たちの支配下にあったためであると考えられるが、この東方ルートはバルト海沿岸やフィンランドを経由してロシアの平原地帯を横断し、黒海ならびにカスピ海沿岸まで深く入りこみ、一方はビザンチン帝国へ、また他方においてバグダート (Baghdad) にさえも通じていた。ここで、いま少しそ

⑧ なお、いわゆる「ヴァイキング時代」に先だて、すでに7・8世紀頃スヴェア族 (Svea) およびゴトランド人 (Gothlands) が東方へと進出し、バルト海東岸のグロービン (Grobin) 即ち今日のリバジャ (Liepaja) が、その武力支配をうけた交易植民地をなしていたようである。このことは、1929年以降におけるグロービンでの埋葬墓地の発掘を契機に、そこから出土したスウェーデンおよび北欧各地、ゴトランド産の副葬品によって裏づけられている。

B. Nerman, *Grobin-Seeburg, Ausgrabungen und Funde* (Uppsala, 1958).

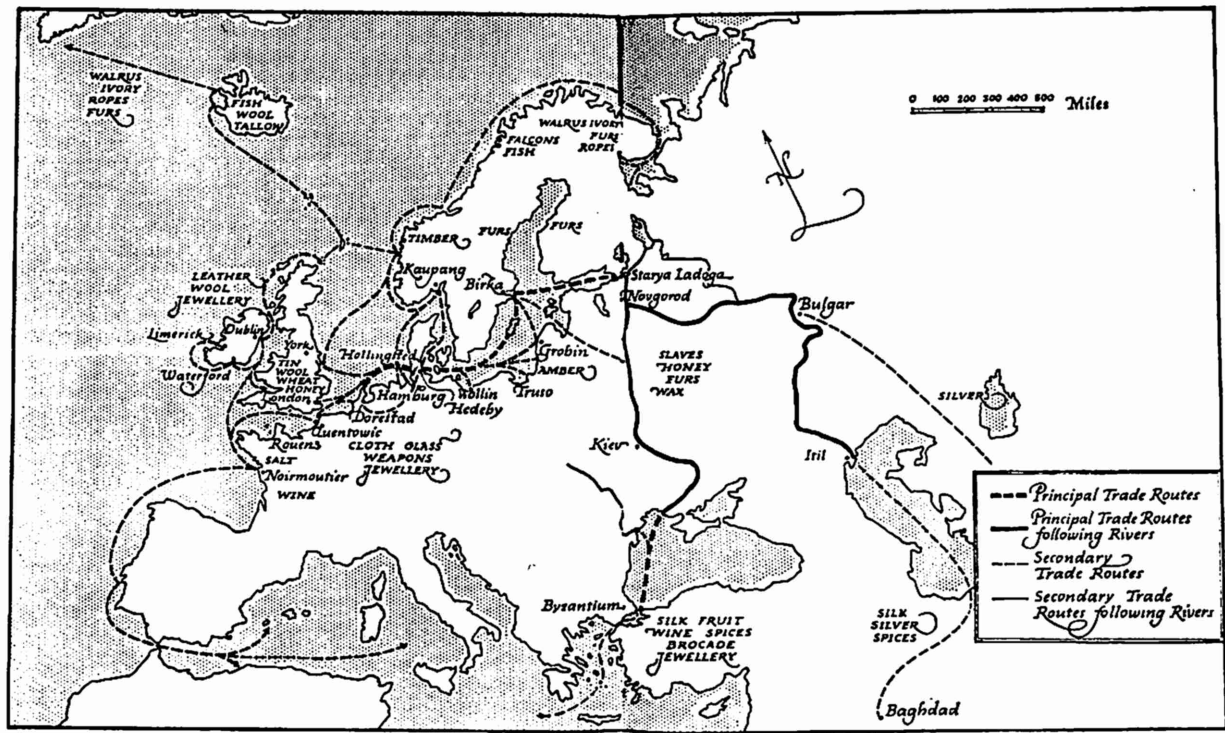


Fig. 4. Map showing the Viking trade routes, Cit., H. Arbman, *op. cit.*, pp. 76-77.



### ヴァイキング期スウェーデンの交易拠点

うした東方交易ルートについてみておくことにしよう<sup>28)</sup>。

先ずビルカを出発したヴァイキングの商人たちは、バルト海を横断してラドガ湖 (Ladoga) の南に位置するアルディギャボルイ (Aldeigjuborg) もしくはスタラヤ・ラドガ (Staraja Ladoga, Old Ladoga) に到達した。そして、ここを拠点にノヴゴロド (Novgorod), スモレンスク (Smolensk) さらにキエフ (Kiev) を経由して南下し、ドニエプル河 (Dnieper) 伝いに黒海へぬけ、コンスタンチノーブルへと向ったのである。これをいま「ドニエプル河ルート」と呼ぶならば、このルートにのるいま一つの方法として、Fig. 4. にもみるごとく、ラドガを経由しなくてもドヴィナ河 (Dvina) を遡行して直接に内陸地帯へと入り、合流することができたものと思われる。

たしかに、このドニエプル河ルートにおいては少なくとも7箇所の急流ないし早瀬があったため、商人たちはそうした地点で積荷を陸あげして運ばなければならなかったとみられるが、このルートの魅力は交易拠点としてのキエフの存在であったろう。ドニエプル河に注ぐ多くの支流が合流するその場所は、周辺の地域から商人たちを吸引するだけでなくスラヴ人たちがその生産物を持ちこんだり、あるいは、そもそも彼らの多くが奴隷として商品化されていく発源地でもあったからである。

しかしながら、この「ドニエプル河ルート」はヴァイキングの商人たちが利用した内陸水路の一つにすぎなかった。即ち、彼らが利用した東方交易ルートとしては、このほかに先のラドガを経由してヴォルガ河 (Volga) に到達し、回教徒世界へのいわば玄関口にあたるカスピ海へと指向するルートもあった。それを「ヴォルガ河ルート」と呼ぶならば、このルートに

<sup>28)</sup> ヴァイキングの東方ルートに関しては、Cf. H. R. Ellis Davidson, *The Viking Road to Byzantium* (George Allen & Unwin, 1976), p.17 ff., part one, Trade and Tribute., G. Jones, *op. cit.*, p. 241 ff., The Movement East., H. Arbman, *op. cit.*, p. 89 ff, chap. iv : Swedish Vikings in the East., P. H. Sawyer, *op. cit.*, p. 193 ff., Michael H. Kirkby, *The Vikings* (Phaidon, 1977), p. 104 ff.

### ヴァイキング期スウェーデンの交易拠点

はヴォルガ河を下る東の曲がり目に、豊かな交易都市であり、且つまた船荷の積み替え基地も兼ねていたボルガール (Bolgar) Ⅷ が存在し、そこで彼らはアラビアからの商人たちとも接触することができたのであった。なぜならば、ヴォルガ河はそもそもカスピ海から遡行して遙か遠くのこの交易都市に到達する船舶が航行しえるほどに十分な水深を有していたからなのである。

ところで、われわれはこうした東方交易ルート——いわゆるアストゥルヴェグ (*austrvegr*) ——との関わりで、ヴァイキング商業における主要な商品であった奴隷取引についてのべておく必要がある。因みに、それはすでにみてきたヴァイキング期スウェーデンにおける銀の集積を解く一つの鍵をなすものと思われるからである。そもそも、メロヴィング時代以降、西欧から東方世界にむけて奴隷が多く輸出され、且つまたそれに照応してキリスト教徒の売却禁止令がしばしば発動されていたことは知られるところだが、しかしこのヴァイキング時代には、フランク王国に隣接した東欧の平原地帯に居住するスラヴ人 (Slavs) 達が、そうした奴隷供給の主要な源泉をなしていた。従って、東方ルートを経由したスウェーデン系ヴァイキングの商人ルス (Rus) ないしヴァレーグ (*Varègue*, Varangian) が、そこにおける奴隷獲得をほぼ独占しⅨ、あるいはそのためにスラヴ人の人間狩り (manhants) を組織的に行ったとみて間違はない。

しかも、そうして得られた奴隷商品はヴォルガ河やドン河 (Don) およびカスピ海を経由してコンスタンチノーブルに運ばれて、そこからアラビ

Ⅷ) 10世紀アラビアの地理学者ムカダシ (Muqqadasi) は、ボルガールの市場で販売された商品名をいくつかあげている。「黒貂、リス、白貂 (ermine)、コルサック狐 (corsac)、岩燕 (martin)、ビーバーの生皮、色つき兎、山羊皮、蠟・琥珀、硬い革 (horny leather)、蜂蜜、はしばみの実 (hazelnut)、鷹、剣、鎧、どんぐり、スラヴ人の奴隷、仔牛、親牛——すべてボルガールの物産である」。

Eric Oxentierna, *The Norseman* (1966), trans. of *Die Wikinger* (Stuttgart, 1959), 福本・本田共訳「ヴァイキング」(『別冊サイエンス』特集・考古学——文明の遺産——1976年) 74頁参照。

Ⅸ) Cf. R. Poertner, *op. cit.*, p. 220.

ア世界に向けて売却されていたとみなされる。他方、いわゆる「ドニエプル河ルート」に位置していた交易都市キエフからも、クラカウ (Krakau) に至る平野を横断し中欧・西欧を通過してスペイン<sup>99</sup>に向う道路を運ばれていったろう。もとより、このスペインに至る奴隷商業の場合には既にヴァイキング商人の手を離れていたかも知れないが、因みにそうした広範な道路網にもいくつかの奴隷市場が存在<sup>100</sup>していた。あるいはさもなくば、こうした特殊な種類の生きた商品が、一部分バルト海経由でスカンジナビア地方へと逆流し、次いで大西洋沿岸にそって南下する、いわば西側ルートでその市場を見出すことにより、農耕・漁撈などの補助的労働に充当される場合もあったと思われる。

#### 4. ビルカの衰退とその諸原因

—結びにかえて—

以上みてきた様に、ビルカはその出土品から明らかにされたごとくヴァイキング期スウェーデンにおける商業都市集落を形成し、それは一方でスカンジナビア地方産出の特産品に関わる集積地として機能し、また他方

<sup>99</sup> Guadalquivir 河畔の都市コルドバ (Cordova) は、10世紀における奴隷市場であった。他方、そうした奴隷は当時マルセイユ (Marseille) からユダヤ人の手で東方へと運ばれたところの西欧の輸出品をなしていた。Henri Pirenne, 'Un contraste économique. Mérovingiens et Carolingiens,' *Histoire Economique de l'Occident Médiéval* (Bruges, 1951), pp. 71—89., 佐々木克己編訳『古代から中世へ——ピレンヌ学説とその検討——』(創文社, 昭和50年) 所収, 20頁参照。

<sup>100</sup> 中部ヨーロッパでは最も重要な奴隷市場として、プラーク (Prague), レーゲンスブルグ (Regensburg), マグデブルグ (Magdeburg) などがあげられる。それらは南へ向っては北イタリアの諸市場と、また、西方に向ってはヴェルダン (Verdun), リヨン (Lyon) との接触を保っていた。因みに、10・11世紀のレーゲンスブルグやマグデブルグは自らの貨幣を鑄造していたのであり、そうした貨幣がスラヴ人地域に多数分布することは、上記の市場が主に奴隷取引に依拠して繁栄したことの証拠とみられている。Cf. R. Poertner, *op. cit.*, p. 220., F. Rörig, *Magdeburgs Entstehung und die ältere Handelsgeschichte*. 2.Aufl. (1952), E. Ennen (ed.), *Frühgeschichte der europäischen Stadt* (Bonn, 1953).

### ヴァイキング期スウェーデンの交易拠点

において、対外的には西欧との接触ならびにとりわけ東方ルートに進出するヴァイキング商業の主要な拠点をなしていたのである。

ところで、ヴァイキングによるこうした商業活動が一体当時の世界にいかなる影響を与えたのかという問題に関しては、それが東欧・西欧のいずれにとっても特別に重要な意味をもたぬところの片面的な性質のものにすぎなかったとする消極的見解<sup>31</sup>がある一方、最近の動向として9世紀以来の西欧諸国における政治的動揺と地中海遠隔地商業の相対的衰微のなかで、いわばスカンジナビア経由でのヴァイキングによる西欧の商品流通に対する刺激を強調し、その活動を国際商業の一つの主演とみようとする立場<sup>32</sup>があるなど、いまだ議論のわかれるところである。因みに、筆者も後者の見解に触発されるものであり、それ以外でも広く当時の西欧諸地域に及ぼしたヴァイキングの社会経済史的影響が少なくはなかったとみるのだが、今この問題についてビルカのみの考察から速断することは控えるとして、以下9世紀初頭に成立したこのスカンジナビア地方の一大交易拠点が、短命にもほぼ10世紀の中葉以降から急速に衰退への道をたどる事実をふまえ、その原因が一体どこにあったのかということを若干の視点から考察し、本稿を結ぶことにする。

(31) 例えば、中世経済史の著名なる先達ポスタン (M. M. Postan) においては、ヴァイキング商人による東方オリエント地方との交易およびそのルートは確かにロマンスの香りではいっぱいであるが、イスラム教徒が購入していた奴隷商品を除けば、東欧と西欧の間にさしたる経済的な依存関係を生みだしえなかった、と主張された。Cf. Geoffrey Barraclough (ed.), *Eastern and Western Europe in the Middle Ages* (Thames & Hudson, 1970), chap. IV., 宮島直機訳『新しいヨーロッパ像の試み——中世における東欧と西欧——』(刀水書房, 昭和54年), 159—162頁参照。

(32) 周知のとおり、フランスにおけるヴァイキング研究の第一人者ミュッセ (L. Musset) は、確かに短期的視点からみるヴァイキングの活動は西欧にとって不幸な結果をもたらしたことが認められるものの、その活動には「ヨーロッパの全地域を交換に目ざめさせ、商品流通に点火」をするものがあって、ビルカはそうした者達の故土である「スカンジナビア半島の最初の真の都市」であるとして位置づけたのである。L. Musset, *Les Peuples scandinaves au Moyen Age* (Paris, 1951). 他方、貨幣史的側面から討究したスチューレ・ボーリン (S. Bolin) は、7—8世紀におけるフランク王国とイス

### ヴァイキング期スウェーデンの交易拠点

さて、ビルカの繁栄が一世紀半しか続かず、11世紀に至るや中部スウェーデンにあってはここよりさらに北寄りウプサラ (Uppsala) との間に位置するシグトゥナ (Sigtuna)——Fig. 1. 参照——に交易拠点としての位置が移動したこと<sup>83</sup>、および、バルト海にあって既に8世紀頃まで西欧との接触をもちながら、一時期その中断を余儀なくされていたゴトランド島のビスビュー (Visby) が、ヴァイキング時代が終るや再び交易拠点として抬頭する<sup>84</sup>ことは、知られるところなのである。

ところで、従前このビルカの衰退をめぐってはルーネ石碑 (Rune stone) にも刻まれて伝えられたフィリスヴォルド (Fyrisvold) の大戦闘<sup>85</sup>の際、エリック勝利王 (King Eric the Victorious) により敗退させられたディーン人の軍隊がその都市集落を破壊したといわれてきたのだが、これとの

---

(前ページ注<sup>82</sup>より続く) ラム世界との従前の経済的関係が、ヴァイキング商人ルスの東方進出によるイスラム圏への奴隷や毛皮の直接輸出を契機に、この時期に断ちきられ、今や東欧・北欧が西欧に代る経済的主導権を掌握したこと、また、アラビア産銀貨の流れの変化はスカンジナビア人による、そうした対東方交易ルートの支配を意味するものであるとして、重要な問題を提起した。Sture Bolin, 'Mohammed, Charlemagne and Ruric', *Scandinavian Economic History Review*, Vol. 1 (1953), pp. 5—39., 佐々木克己編訳『古代から中世へ——ピレンス学説とその検討——』(創文社, 昭和50年) 所収, 133—176頁参照。

<sup>83</sup> L. Musset, *op.cit.*, p. 45. なお、ビルカの終期について G. Jones はほぼ970年とし、ブリヨNSTED (J. Brønsted) はこれを975年とし、ソーヤー (P. H. Sawyer) はおそらく980年の前とするなど、微妙な相違がみられなくはない。Cf. Gwyn Jones, *A History of the Vikings* (Oxford, 1969), p.7 & p. 174., Johannes Brønsted, *The Vikings* (Penguin Books, 1978), p. 163., P. H. Sawyer, *The Age of the Vikings* (Arnold, 1975), p. 184.

<sup>84</sup> Holger Arbman, *The Vikings* (Thames & Hudson, 1970), pp. 46—47., J. Brønsted, *op. cit.*, p. 163.

<sup>85</sup> この Fyrisvold の戦闘 (980年頃) について、筆者はオーフス (Århus) 大学の知人でルーネ石碑に詳しい N. Ikeda 氏から御教示をいただいた。要するにこの戦闘は、文献史料上ではノルウェー王朝史である Snori Sturluson の Heimskringla の最初のサガ、ユングリング・サガ (Yunglinga Saga) 第22章に語られているフューリスヴュルム (Fyrisvöllum) の戦いを指すものとみられ、場所はウプサラの近郊においてである。それを示唆するルーネ石碑の所在地点と解説については省略。

### ヴァイキング期スウェーデンの交易拠点

直接的な関連については不明な点が残るので留保しておくとして、われわれはこの交易拠点が常に銀を必要とし、いわばそれによって成長を遂げてきたとみなしうる性質上、先ず東方ルートの遮断とイスラム世界からの銀の途絶を指摘しなければならないだろう。即ち、ここにいう東方ルートの遮断とは、より直接的には既述の交易都市ボルガール (Bolgar) が970年頃スラヴ名スヴィヤトスロフ (Svyatoslov) で知られる人物の率いる一軍に襲撃された<sup>69</sup>ことを意味するが、もとよりこの「ボルガールルート」においてだけではなく、いま一つの「ドニエプル河ルート」周辺もこの時期以降、東方トルコ系遊牧民クマン族 (Cumans) の襲撃を繰り返しうけることになったのであり、いずれにせよヴァイキングの商人たちは10世紀後半以降イスラム世界との結びつきを絶たれるに至った。

因みに、そうしたことを示唆する有力な証拠の一つとして、ピルカ遺跡から出土したアラビア銀貨「ディルヘム」 (dirhem)、即ちユーフラテス下流の町クーフアで製造されその文字が刻印された貨幣の、10世紀中葉以降における著るしい減少<sup>70</sup>をあげることができるだろう。しかし、このよ

<sup>69</sup> Cf. Frédéric Durand, *Les Vikings* (1965), 前掲邦訳, 62頁。G. Jones, *op. cit.*, pp. 173—174., H. Arbman, *op. cit.*, p. 103.

<sup>70</sup> 以下の数字は、アッブマン (H. Arbman) による。

<i>Date of Coins</i>	<i>Number found in Birka graves</i>
700—750	12
750—800	14
800—850	17
850—890	4
890—950	42
950—	1

H. Arbman, *Svear i österviking* (Stockholm, 1955), p.135., by way of P. H. Sawyer, *op.cit.*, p.185. なお、8世紀に属するコインの存在は、ピルカの埋葬墓がその頃に既に存在していたことを意味するものでない。なぜなら、スカンジナビア地方ではそうした古いコインが長い間流通していたとみられるからである。事実、例えばある埋葬墓においては818—19年のコインが913—32年に属する4枚のコインと共に発見されたのである。Cf. P. H. Sawyer, *Loc. cit.*

### ヴァイキング期スウェーデンの交易拠点

うにビルカと東方ルートとの関わり的重要性を考慮して、富の源泉が断たれたことをビルカ衰退の説明に不可欠な原因とみるにせよ、他方われわれはビルカそのものに目を転じ、いわば交易拠点としての制約された立地条件について少しく指摘しておく必要がありはしないだろうか。

このことには第2節でも既にふれてみたのだが、ビルカは東方との遠隔地商業と結びつく一大交易拠点としては極めて特異な場所に位置していたと思われることなのである。

そもそも、スカンジナビア地方における交易拠点がしばしばフィヨルドの奥地など外海から遮蔽された場所に位置したこと、しかもそのことがヴァイキング時代における略奪に結果する損失の回避にある種の効力を有したことは認められてよいだろう。

ビルカが位置する Björkö 島 (Björkö) も、それ自体複雑に入りくんだ狭い海峡を介してバルト海と結びついていた。ただし、この島は中部スウェーデンの諸地域と湖あるいは河川づたいで容易に連結される位置にあり、その点でとりわけ水系の凍結がみられた冬期間に、かのスカンジナビア特産品が集積される市場として機能しうることに利点を有したと思われる。第三節で指摘した黒土層での氷斧や獣骨製スケート類、及びアイゼンなどの出土は、それを装着した者たちのビルカへの往来を示唆する意味でこのことと関わっている。ところが、考古学的調査によるとヴァイキング時代には確かに Björkö 島の水位が今日のレヴェルより少なくとも約15フィート以上は高くなっていた<sup>87</sup>ことが認められるものの、後にこの島で水位の低下現象が生じたことも同時に明らかにされているのである。その証拠にかつて都市集落ビルカの東側には約275×65ヤード (=250×60m) 程の潟湖 (lagoon) が存在していた形跡がある。それは一部石造りの壁をもつ、幅33ヤード (=30m) 水深3メートル以上の水路で外に接続されてい<sup>88</sup>た

<sup>87</sup> Sune Lindqvist, 'Vattenståndet vit Birka på 900-talet,' *Fornvännen*, xiii (1928), pp. 118—120. Cf. P. H. Sawyer, *op. cit.*, p. 183.

<sup>88</sup> *Ibid.*, p. 184., F. Durand, *op. cit.*, 前掲邦訳, 98頁参照。

### ヴァイキング期スウェーデンの交易拠点

とみられるが、そうした潟湖も今や干上っている。おそらく、ヴァイキング時代に関わるこうした水位の変動や、あるいは当然にして起りうる沈泥化の現象も、ビルカに寄港する船舶に少なからざる影響を与えた<sup>40)</sup>のではなかろうか。加えていえば、最近の調査で明らかにされたことであるのだが、ビルカを出港しバルト海の南に出る船舶が通過した Södertälje なる水路には喫水の浅いヴァイキング船にとってさえ難関とみられる箇所が存在した<sup>41)</sup>のであり、これらのことは状況次第によってバルト海周辺の交易ルートそのものに何らかの変更をもたらす原因をなしたろう。因みに、11世紀以来の北欧商業が、いわゆる「かさばる商品」を主流とするものであったことを想起するときに、交易拠点としてのビルカの限界が一層明らかになってくるように思われる。

またこのことを除いても、元来ビルカの周辺にその広範な交易の基礎をなす手工業的発達が特にみられたわけでもなく、あくまで仲介商業の拠点にすぎなかったから、その後の西欧で、いわゆる「商業の復活」期に急速な成長をした中世都市ともいささか異っていて、そうした類いのものに結びついていく生命を持続することも不可能なことであつたろう。

(1980. 9. 30)

<sup>40)</sup> P. H. Sawyer, *op. cit.*, p. 184., G. Jones, *op. cit.*, p. 169.

<sup>41)</sup> Cf. Maj Odelberg, *BIRKA* (Statens Historiska museum, Stockholm, 1974), pp. 31—32.